

旺文社

漢和辭典

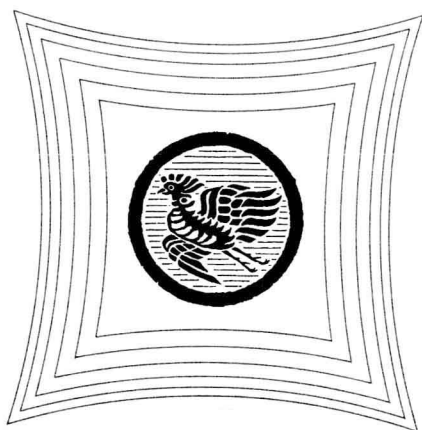
赤塚忠 阿部吉雄 編

全国学校図書館協議会・日本図書館協会選定図書

旺文社

漢和中辞典

東大名誉教授 赤塚 忠 編
文学博士
東大名誉教授 阿部吉雄
文学博士



編者のことば

漢字・漢語は、わが国語のうちに重要な位置を占めている。われわれの言語活動にとって、その豊かな知識と正しい活用とが欠かせないことは、改めて言うまでもない。現今のように社会機構が複雑になればなるほど、人間関係を緊密化するための言葉を大切にしなければならぬが、言葉すなわち国語を愛することは、漢字・漢語を大切にするでもある。

とくに、漢字・漢語は、わが国民の優れた教養を培った古来の諸知識を、現代に至るまで永く持ち伝えているという特色がある。その諸知識を確かめるには、わが国の古典だけではなく、中国の古典その他の諸文献の学習にまで立ち返らなければならない。つまり、漢字・漢語の学習には、その知識によって、それらの文献を自在に読みこなせることが要求されている。それに応ずるには、小さな辞書に収めることができないほど多くの数の漢字・漢語を用意しなければならない。

この反面、多過ぎる漢字・漢語を適正に整理して、能率的な実用の便を図るとともに、雅正で簡明なわが国語の発達に寄与することも、現下の急務である。

また、かつては、漢字・漢語はわが国と中国との文化を通ずる大きな橋であったが、中国の現代語が変容したただけでなく、旧来の漢字の字形が変わったものが出、語義の異なってきたものも少なくない。日・中関係を考えると、同類の漢字・漢語を使用するに当たって、このことを心得ておくべきであろう。

このような問題を前にして、わたくしどもは、当面の用途だけに限定した小辞典でもなく、集めた文字と熟語の多さを誇る大辞典でもなく、必要な限りの漢字・漢語をほぼ完全な状態に収録してその全容が見通せるようにするとともに、体系的に整理されていて、だれにも利用され、抛りどころとされる漢和辞典が必要なことを痛感した。

そこで、高度な学問的水準を維持しながら、しかも平易かつ完備したもので、この一冊で、中学・高校生から、大学生・実務家・作家にも、はたまた国語の教師や、漢文の専門家にも役立ち、さらに一般家庭にも常備して、いつも気がるに利用され、愛用される漢和辞典を、あえてわたくしどもが編集することとした。

右の目的を達成するため、編集のおもな方針を左のように定めた。

- 一、徹底した体系的著述であることを期するとともに、説明を極力簡明平易にし、多面的な利用に適應させること。
- 二、漢字・漢語本来の意味と国語における転用との区別を明確にし、また現代の国語生活での実用性を常に考慮すること。
- 三、基本となる漢字、必要度の高い漢字等を区別して重要度に段階を設け、それに応じて必要十分な解説を与えること。
- 四、用例・類義語などを豊富に用意して、実用の便を図ること。
- 五、語法欄を設けての説明、その他手段を講じて、漢文・国語学習に役立つようにつとめること。
- 六、日常使用の漢字・漢語から高度な漢文獻読解に必要なもので精密に検討して、実用上必要な親字の限界、約一万一千字と、必要な熟語の大部分、約六万二千語を選定すること。
- 七、甲骨文字・金文・篆書の変遷を考え、これを掲げて親字の字形を正し、また、異体字欄を設けて正・俗の字形を明らかにし、さらに同じ類型の漢字の字形を統一して、漢字形の混乱を正すこと。
- 八、字義は、極力詳細に掲げ、しかも解字によってその原義を明らかにし、以下、発展した意味、転用された意味、借用された意味等の関係を示し、かつ、これを展開順に配列して、意味を正確に区別するとともに、おのずからそのニュアンスまで理解できるようにすること。
- 九、従来踏襲されて来た、解釈・用例などの誤りを、博物名なども含めて及ぶ限り訂正し、的確に解説し直すこと。
- 一〇、漢字・漢語の正確な修得のため、同訓異義・注意・参考などの欄を設けて懇切に説明すること。
- 一一、親字には、中国の現代音をローマ字で表記し、簡化字のあるものはこれを対照し、字義の現代における変化にも注意すること。
- 一二、熟語中には、主要な人名・地名・書名・歴史的事件・文化的事象、その他を網羅し、小百科事典の用を兼ねること。
- 一三、故事成語はできるだけ多数収録し、豊富な用例とともにその出典を詳細に明記すること。
- 一四、図版類には、とくに最近までの考古学的成果を取り入れるようにつとめること。
- 一五、付録には、漢字・漢文の学習、ならびに中国文化の理解に欠かせないものを精選すること。
- 一六、部首索引・音訓索引・総画索引のほか、新たに部首別索引を設けて難字の検出を容易にし、能率見出し・柱見出しに工夫をこらして初心者にも引きやすく見やすくすること。

原稿の執筆は、衆知を結集すべく、全国にわたって同志を募り、中国関係諸学の専門家ならびに中学・高校の實際教育にたずさわっている人々に委嘱した。またその貴重な助言を十分に吸収するようにもつとめた。

寄せられた原稿は、編集委員が合同して校閲し、再三の討議を経て、必要な修正を加え、また全体的統一を図った。校正には、編集委員・校正委員ならびに旺文社辞書編集局員が当たった。

着手してからまる八年、編集委員の絶ゆまぬ努力により、順調に進捗して、所期の編集を終わることができた。この辞典があまねく多くの方々に愛用されることを望んで止まない。

わたくしどもは、従来、二三の漢和辞典の編集を手がけたが、その諸経験をこれに傾注したつもりである。それにしても、なお遺漏のあることを恐れる。本辞典を手にはされる方々が、随時、叱正の労を惜しまれないようお願いする。なお、旺文社社長赤尾好夫氏を始め辞書編集局員の諸氏は、本辞典編集の目的とその業務の異常な困難さに、格別に深い理解を示され、その推進を熱誠に援助され、困難打開にあらゆる便宜を取り計らわれ、かつ、出版の万全を期せられた。厚く感謝する。

終わりに、編集の労をともした人々の名を列記する。とりわけ、畏友山田勝美博士からは懇切な援助と貴重な助言とを得た。また、小和田 顯氏は、八年の長期、いささかのいとまもなく、終始一貫して、諸業務の統制と改善とに任じ、編集の進捗に尽力した。完了の功は同氏に負うところが多い。銘記しておきたい。

〔編集委員〕

伊東倫厚 遠藤哲夫 小和田 顯 斎藤喜代子 妹尾 勇 西岡市祐 沼尻正隆 林 茂夫 山田勝美（五十音順）

〔執筆・校正〕

青木木菟哉 石川忠久 井上源吾 上田弘毅 宇野茂彦 江頭 廣 大嶋 隆 大橋信夫 岡田 脩 加藤道理
川久保広衛 栗原圭介 黒岩嘉納 巨勢 進 澤田多喜男 志賀一朗 雪石鉦吉 篠原壽雄 新開高明 進藤英
幸 滝沢俊亮 田中 有 中川太郎 新田大作 萩庭 勇 橋本栄治 舞田正達 三上誠治郎 水上静夫 柳町
達也 柳本 実 山岡利一 山口角鷹 山口義男 湯浅 麗 横山永三（五十音順）

昭和五十二年秋

赤塚 忠
阿部 吉雄

凡例

この辞典の構成と内容

親字

収録字数 約一、〇〇〇余字

当用漢字（教育漢字を含む）・人名漢字などの常用漢字を中心に、日本および中国の主要文献の読解に必要な漢字、文字の系統的理解に必要な漢字、および実用される国字などのほとんど全部を収めて、一般および専門の学習・研究、並びに社会生活の実用に不足ないようにした。

熟語

収録語数 約六二、〇〇〇語

(ア) 国文・漢文で用いられる、漢字を用いた主要な熟語、難読語など。

(イ) 主要な故事熟語・成句・著名な詩句など。

(ウ) 漢字学習上主要な人名・地名・書名・官職名・動植物名など。

索引

親字を検索するために次の三種類の索引を設けた。

1. 音訓索引

親字の音または訓がわかつているときに用いる。親字の音訓を五十音順に配列して検索する索引。

2. 総画索引

親字の音訓などがわからないときに用いる。総画数順に配列した索引。

3. 部首別索引

親字を部首別に、本文と全く同じ順序に配列したもので、部首の見当をつけながら親字を検索する索引。とくに部首を誤って引きやすい漢字は、所属する正しい部首を示した。

付録

巻末に漢字漢文の学習、および中国文化の理解に必要な項目を収めた。

- | | |
|---------------|-----------------------------|
| (1) 漢字の成立と構造 | (10) 中国古典参考図 |
| (2) 熟語の構造 | (11) 六十四卦・五行・十二支・時刻・方位・二十八宿 |
| (3) 漢字の筆順 | (12) 中国歴史地図 |
| (4) 漢文の読み方と句法 | (13) 中国度量衡表 |
| (5) 漢語 | (14) 字音かなづかい表 |
| (6) 中国の思想と文学 | (15) 平かな・片かなの起源 |
| (7) 中国文化史年表 | (16) 行書・草書一覽 |
| (8) 中国年号一覽 | (17) 重要学統図 |
| (9) 中国簡化字表 | (18) 人名用漢字表 |

親字について

一、字 体

1. 当用漢字は「当用漢字字体表」（昭和二十四年内閣告示第一号）により、人名漢字・補正漢字も、それぞれ「人名用漢字別表」（昭和二十六年内閣告示第一号）・「人名用漢字追加表」（昭和五十一年内閣告示第一号）・「当用漢字補正案」（昭和二十九年国語審議会報告）によった。

2. 前項の「当用漢字字体表」などによって指定される以前の字体（旧字体）、およびその他の漢字（表外漢字）の字体は、「康熙字典」をおもな根拠として、広く通用している字形によった。

3. 通用する字形が二種類以上あるときは、おもに「康熙字典」により正字を決定したが、「康熙字典」が典拠にならない場合は、「説文」の篆文などにより、文字の成り立ちを考えて正字を判定した。

ただし、通用の字形で検索される辞典の実用的機能を重視して、理論的な観点のみから字形の訂正や異体の統一を行うことは避け、おもに「解字」などの項で本来の正しい字形を指摘するようにした。

4. 多くの文字に共通な構成要素などで、不統一のために混乱を招くものは、無理のない範囲で、字形と画数の統一を図った。

二、配列

2、各部の文字は、部首を除く画数順に分け、同画数の文字は現代かなづかいによる代表的な字音（国字の大部分では字訓）により五十音順に配列した。

3、当用漢字・人名漢字の新旧字体が異なるものは、すべて新字体でその該当個所に掲げ、旧字体もあわせて示した。

4、以上のほか、検索の困難を軽減するために、検索用見出しを設けた。

(ア) 当用漢字などの旧字体の該当箇所にも見出しを掲げて読みを示し、新字体と解説のあるページ段数を示した。

(例)
(西11)【醫西】
いやす 「医」(二四七2)の旧字体

(イ)親字の解説中の「異体」(後述)の項にあげた重要な異体字は、各文字の該当箇所にも見出しを掲げて読みを示し、主たる親字と解説のあるページ段数、およびその親字との関係を示した。

（例）
（イ 9）**【候】**
コウ（候）（七 4）の本字

(ウ)所属部などをまちがえやすい文字は、誤って引く個所にも見出しを掲げて読みを示し、解説のあるページ段数を示した。

(例)
(1.3)
【字】
教当
あきジ
↓
二九
2

三、部首の標示と解説

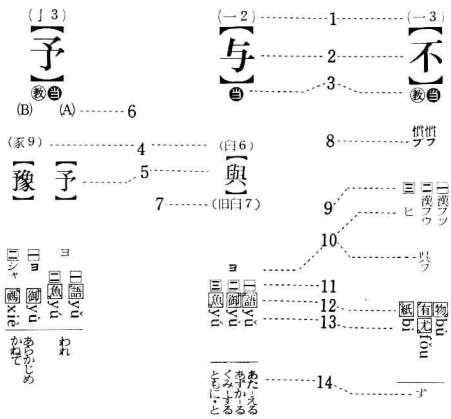
各部の冒頭に、共通な構成要素として用いる部首の実際の形と名称（心

凡例

四、親字の見出し

親字の見出しは、次のような体裁に従って掲出した。

(例)



1、所属部首と画数 親字の所属部首の形と部首を除いた画数を示す。

2、親字 掲出親字を示す。

3、漢字の種別 当用漢字（教育漢字には特に重ねて符号を付けた）・人名漢字などの区別を示す。

4、旧字の部首と画数	当用漢字などで字形の異なる旧字体があるものは
5、旧字の字体	その部首と画数もあわせて、字形を掲げた。

6. 二種以上の旧字の區別 当用漢字の新字が、二種類以上の旧字を兼ねて用いられるときは、(A)(B)で區別して、各旧字をあわせ掲げた。

7. 部首・画数の変更 従来の部首と画数もあわせ示した。

8. 通用音 (ア) 親字の音は、片かなで現代かなづかいによって示し、

9. 字音の區別 歴史的かなづかいによる表記は(一)に入れてその下にそえて示した。

(イ) 「当用漢字音訓表」(昭和四十八年内閣告示第一号)に示された音は、太字で示し、特殊な場合に用いる音は、傍線を付けて示した。

(ウ) 字音は、呉音・漢音・漢音・呉音が変化して広く通用する慣用音、および唐音(宋音)を區別して略語で示したが、漢音・呉音が共通するものはこの區別を省いた。

(エ) 漢字音は実用上支障のない範囲で整理したが、両音ともに行われる場合などは併記した。漢音・呉音も不必要な場合は一方を省いた。

(オ) 字音の配列は、「音訓表」の音や広く通用する音を前に置き、字音の區別が「意味・用法」と関連する場合には、□□□…によって區別して、「意味」の□□□…と対応するようにした。全体を通じて慣用される通用音は、この區別に優先させて先頭に置いた。

(カ) 字音は、漢字全体を系統的に整理する必要上、「字音かなづかい」に関する実証的研究の成果を採用せず、「広韻」などの反切によって統一した。

11. 字韻の區別 (ア) 各字音が所属する韻目(平水韻)と四声とを略号(↓)で示し、

12. 字韻 (ア) 付録「漢詩」で示して、詩の鑑賞や作詩の便に供した。

(イ) 韻(発音)の區別が「意味」と関連するときは、□□□…によって區別して、「意味」の□□□…と対応するようにした。

13. 中国現代音 (ア) 現代中国語の発音はローマ字表記で示し、また、発音の區別が主要な意味と関連するときは、その區別も示した。(一)に入れた音は、文語音・旧音を示す。

(イ) ローマ字表記は、「漢語拼音方案」(一九五七年制定)によった。

14. 字訓 (ア) 主要な字訓は、横線の下に掲出し、特に「当用漢字音訓表」

に示された訓は、太字で示し、送りがなの部分は細字にした。特殊な訓は、傍線を付けて示した。

(イ) 字訓が活用語の場合は、活用語尾をハイフン(一)で區別した。

五、解 説 (ア) 親字の解説は次の順に行ったが、親字の重要度、意味の各項目の重要度・難易度を考慮して一律に臨ることを避け、それぞれの場合に必要な解説が得られるように配慮した。

(イ) 必要な文字を全部収載するために、意味・用法の範囲が狭い若干の文字では、項目の見出しなどを省略したが、解説の手順は同様にした。

六、解 字 漢字全体の組織を念頭において、すべての文字に、統一的な視野で、字源・構造に関する解説を与え、特に当用漢字を中心とする常用漢字および漢字構成上の基本になる文字では解説を詳細にした。

1. 親字構成の基本原理を示すために、六書の象形・指事・会意・形声・假借・転注に象形指事と会意形声を加えた分類名を用いた。

2. 基本になる文字や原形からの変遷が著しい文字などには、甲骨文字・周金文・篆文の順に古代文字を掲げたが、これらの文字は実際に記録されたものから選んだ。また、当用漢字のうち「説文解字」に収録されているものには、すべて篆文を示した。

3. 次に、親字の構造を分析して原義を明らかにし、「ひいて(その意味が延長されて)・または(転用されて)基本義や重要な意味を表したり、(借りて(借用されて)他の意味に用いられた)りする次第を説いて、意味展開の骨子を示した。その際、字形から最短距離をとって基本義に到達するように思いをこらした。

4. 漢字の大部分を占める形声字の場合には、音声学などの常識に従って、厳密な手続きにより同じ系統の音であることを確かめるようにし、みだりに転音を用いて説明することは避けた。

(ア) 解字の項で用いる字音は、歴史的かなづかいにより、原則として漢音で表した。

(イ) 音符になる文字の音が親字の字音と異なる場合は、音符向きのよ

掲げた。

6、双声・疊韻・双字（同字反覆）などの連綿詞は、主として、「↓」を付けて熟語を参照するようにしたが、必要な場合は「意味」で説いた。

7、古典の注解や字書で広く用いる同義の文字は、近音同義の文字も含めて、訓義のあとに（一）に入れて示した。

8、語源的に同系統の同音同義の文字は、原則として「Ⅱ」を用いて示し、文字の系統的な理解の一助とした。ただし、その意味の本来の文字から仮借（借用）義の文字を示す場合や、同系統であっても字音の隔りが大きいものなどは「Ⅲ」を用いて区別した。

9、反対語として対をなす文字は「Ⅳ」の記号を用いて示した。

10、意味・用法の理解を助ける例文は、基本的な古典から適切で著名な例を選び、疑義がある場合は、逐一原典によって検討しなおした。

11、旧説を訂正した場合は、従来の有力な解釈も残して、批判と取捨に備える配慮を加えた。

12、江戸時代以後の日本文学に影響を与えた、近世の白話小説などで用いられた字義、および現代中国語の重要な意味も【国】の記号をつけて解説した。

13、解説中で用いた語が読みにくいものには、読みがなをそえたが、特に現代中国音を示す場合は（一）に入れて区別した。

14、国語の分野には、現代の漢和辞典として十分な注意を払うように努めたが、国語だけで用いられる特殊な意味・用法には、特に【国】の記号を付けて区別した。

15、最後に、「人名」の項目を設けて、人名に用いる読みを示した。

一〇、語 法

親字の意味・用法のうち、助字としての用法など、特に文法的な役割りの大きな部分をまとめ、逐一用例をあげて詳細に解説し、漢文の読解に役立つようにした。

一一、同訓異義

同じ訓で読みながら意味が異なる文字の主要なものについて、それぞれ

れの相連を明らかにした。解説はその読み方をする最も一般的な親字の個所に置き、他の文字では解説箇所を参照させた。

二、参 考 その他の参考知識をまとめて掲げた。

1、親字の特殊な用法・類似の漢字の記憶法など

2、平かな・片かなの起源

3、同音の書きかえ字

4、形声字の分類と解説

その親字を音符とする形声字群を掲げて、意味の共通性によって類別し「解字」などと呼応して、漢字に対する興味を呼び起こし、漢文の系統的理解に役立つようにした。

熟語について

一、配 列

1、原則として音読みで掲げ、字数・長短にかかわらず二字目以下の五十音順によった。五十音順が同じ場合は、二字目の画数順とした。

2、異体・通用などの関係にある、別な文字を用いて同一の語を表す場合は、これを一語として扱い、【一】内に一括して掲げた。掲載順は、常用の形を先にしたが、当用漢字を用いるものは優先的に扱った。

【例】【人煙・人煙】【事跡・事蹟・事蹟】

また、意味・用法の点でして区別する必要がなく、国語の現代表記で書きかえられる少数例もこれに準じた。

【例】【火炎・火焰・火燄】

3、ある熟語に他の語辞がついてできた派生語、および意味上から真の派生語でないものも、基本熟語と字体を共にするものは、便宜上『』に入れてその熟語の次に全体の読みの五十音順で掲げた。

【例】【太宰】『太宰春台（臺）』

『太宰伯』『太宰府』

4、返り点のついた語で派生語とならないもの、および特別に訓読した語

句は、一般熟語の最後に五十音順で一括して配列した。

二、字体・旧字体表記

1、当用漢字の字体は「当用漢字字体表」により、新字体といちじるしく字形が異なる漢字に限り、その旧字体を（ ）に入れて示した。ただし親字と同じ第一字目の漢字（返って読む場合は第二字目以下）には改めて旧字体を示さなかった。

（例）【悪心】アクシン 【制圧（壓）】アキアツ 【忘寝食】ワシヤク

2、補正漢字（または人名漢字のうち、新字体で示されたものは新字体で掲げ、旧字体を（ ）に入れて示した。

（例）【土塙（塙）】ツツノ 【雪溪（溪）】ユキセキ 【玉蘭（蘭）】タマラン

三、漢字記号 熟語見出しの漢字の上に次の記号を付けて種別を示した。

△……当用漢字表にない漢字。（例）【青瓷】アヲシ 【韻連】インレン
（△）……国語の現代表記の書きかえのうち、関係の近い他の文字で代用したもの。（例）【対座（坐）】タイザ 【下克（剋）上】ゲキヤウ

四、よみがな

1、熟語の下に、よみがなを現代かなづかいで、音読みのものはカタカナ訓読みのものは、ひらがなで示した。

2、歴史的かなづかいのあるものは、現代かなづかいの下に、前項の要領により（ ）で示した。

（例）【九淵】クウエン 【覆水不返（盆）】フクスイフタヘン

3、現代中国音は国語審議会の外来語表記法に準じ、（ ）の中にカタカナで示した。

4、国訓、および国語読みは、読みがなの上に国の記号をつけた。また、二つ以上の読みがあるものは、それらを併記した。

（例）【熱弁（辯）】ネンベン 【流説】リウセツ 【国】クニ

五、語 釈

同一の熟語で読みの相違によって意味が異なる場合は、①②③の記号で区分し、同じ読みの中で意味が二つ以上ある場合は、①②③の記号、さらに細分するときは、(1)(2)の記号で区分した。

六、用例・出典

語釈を明確にするために用例を多くし、その出典を明示した。

1、引用文は「」で囲み、その出典は（ ）の中に示した。書名のほか、編目名も示し、詩文には作者名・題名をも示した。

2、見出し熟語に相当する部分は「」で、返って読む場合は「」の形で示した。また、特にむずかしい箇所には、読み・訳を施した。

七、同義語・反対語・双声疊韻の語

語釈の末尾に、同字数の熟語の中から同義語・反対語を厳選して掲げ、それぞれ「」・「」の記号で示した。また、（ ）で双声疊韻の語であることを示した。

八、同音の漢字による書きかえ

原則として、国語審議会の発表（昭和三十一年第三十二回総会報告）の範囲内で行い、解説の末尾に参考欄を設けて明示したほか、前出（三）の記号によって示した。

（例）【決潰】ケツクヅ……【参考決壊が書きかえ】。

九、参考・注意

語釈の末尾に適宜参考・注意欄を設けて、見出し熟語の使用上の参考事項および注意事項を説明した。

一〇、逆熟語

漢文学習・日常漢字生活に必要な、親字が下についてきた逆熟語を、熟語配列の末尾に◇印を付けて五十音順に掲げた。

（例）【拮】◇簡拮・採拮・推拮・銓拮……選択

出典

1、書名は通用する名称を用い、次のように略称した。

晏子春秋（晏子）	旧唐書（旧唐）	春秋穀梁伝（穀梁）
淮南子（淮南）	春秋公羊伝（公羊）	春秋左氏伝（左伝）
顔氏家訓（顔氏）	孔子家語（家語）	山海経（山海）
韓非子（韓非）	後漢書（後漢）	三国志（三国）

新唐書(新唐) 戰国策(戰国) 白虎通義(白虎通)
世說新語(世說) 資治通鑑(通鑑) 呂氏春秋(呂覽)
2、書名には、編名・章名などの細目も掲げるようにした。

〔例〕 (晏子・諫) (家語・王言) (戦国・秦策)
(易経・乾) (国語・魯語) (孟子・梁惠王)
(淮南・原道) (詩経・都人士) (礼記・檀弓)
(韓非・内儲) (書経・洪範) (論語・公治長)

3、出典が詩文などの場合は、「作者名・題名」を示し、詩の場合は末尾に「詩」と明示した。
題名に、詩・歌・吟・行・曲・賦・辞・句・詠などとある場合は、「詩」を省いた。
4、詩文の題名が十字以上のものは、上から5、6字以内を示し、あとは「…」として省略した。

おもな記号・略号

親字関係の記号

〔教〕……教育漢字
〔加〕……教育漢字外の当用漢字
〔補〕……補正案で加えられる字
〔削〕……補正案で削られる字
〔人〕……人名用漢字

〔音〕……字音・韻の相違によって訓義に違いがある場合、それぞれの頭につけて対応させる

〔音〕 慣……慣用音 呉……呉音
〔音〕 漢……漢音 唐……唐(宋)音

〔国字〕……親字が国字の場合に示す

〔一〕……意味欄で、訓義が活用語の場合、活用語尾の前に「一」を入れ、その文語形を(一)に入れて示す

〔一〕……語源に關係の深い同音または近似音の文字で、意味・用法がほぼ同じものを示す

〔一〕……同音の字を借用したもの、および音の変化が著しい同義字を示す

熟語関係の記号

△……当用漢字表にない字
(△)……同音の字による書きかえの場合、もとの字を包む
()……当用漢字の旧字体。字体・画数に特に相違のある場合に示す
()……補正漢字で、字体を改め音訓を加える字。「燈」→「灯」で、熟語字数が四字以上の場合の扱い

①②③……読みの異なるに從って意味も異なる場合、それぞれの読みの頭につける

△……同義語を示す
▽……他の親字に属する熟語を参照させる場合、頭につける

▽……逆熟語の始まる頭につける

親字・熟語に共通の記号

①②③……親字の訓義や熟語の意味がいくつかに分つ(イ)ウ)かれる場合

〔国〕……国語の訓義

〔現〕……現代中国語の意味

〔俗〕……おもに近世小説などに用いられた白話の意味

↑……反対語・対応語

〔↑↓〕……意味・訓義が①②…、(イ)…などと分かれるそのすべて、またはいくつかに共通する同義語、反対語・対応語
百科語の記号

〔植〕 植物
〔医〕 医学・生理学
〔語〕 文法・語学
〔人〕 人名・作中人物名
〔書〕 書名
〔仏〕 仏教語
〔哲〕 哲学・倫理学・論理学
〔法〕 法律
〔地〕 地名
〔数〕 数学
〔理〕 物理学・化学
〔文〕 文芸
〔芸〕 芸術
〔演〕 演劇
〔音〕 音楽

音訓索引

音訓索引

【あ】

3	20	19	16	15	14	13	12	11	9	8	7	6	3
于	呀	鋸	龜	關	鋸	鴉	窪	雅	痾	蛙	姪	姪	阿
三六	一八	二九	二九	二八	二六	二七	二八	二八	二九	二九	二九	二九	二九
3	3	3	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3

9	7	2	19	16	15	14	13	11	10	8	6	5
娃	咳	哇	哀	呃	讀	噫	噫	意	噫	噫	噫	噫
二八	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二
3	2	1	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3

18	17	16	15	14	13	12	11	10
穢	愛	暖	噫	噫	噫	噫	噫	噫
八三	九一	九一	九一	九一	九一	九一	九一	九一
4	1	1	1	1	1	1	1	1

あえ あい あい あい あい あい あい あい

17	14	12	11	10	9	6	5	20
觀	遭	翁	逢	近	值	合	會	萬
一三	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
3	3	3	3	3	3	3	3	3

あか あか あか あか あか あか あか あか あか

17	14	12	11	10	9	6	5	20
觀	遭	翁	逢	近	值	合	會	萬
一三	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
3	3	3	3	3	3	3	3	3

あか あか あか あか あか あか あか あか あか

17	14	12	11	10	9	6	5	20
觀	遭	翁	逢	近	值	合	會	萬
一三	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
3	3	3	3	3	3	3	3	3

あか あか あか あか あか あか あか あか あか

17	14	12	11	10	9	6	5	20
觀	遭	翁	逢	近	值	合	會	萬
一三	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
3	3	3	3	3	3	3	3	3

あか あか あか あか あか あか あか あか あか

一、この索引は、本辞典に収めた漢字を現代かなづかいによって五十音順に配列した。
 一、かなの見出しは音を、ひらがなで見出しは訓を示す。同じ見出しの中は画数順に配列した。
 一、漢字の上の記号——き教育漢字で音訓表にある読み方 ト教育漢字で音訓表にない読み方
 一、当用漢字で音訓表にある読み方 ト補正案で音訓表にない読み方
 一、補正案で加えられる漢字 ホ補正案で削られる漢字 人名漢字
 一、漢数字はページを示し、その下の算用数字(114)は、ページの段数を示す。

索引

ア あきざら

【二】

[illegible]

あたわず——あら

三三三

[illegible]

いーいそ

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com